

## 幼稚園児における共同遊びの展開

—イメージの共有との関連—

向 悦\*

### The Continuity of Cooperative Play by Preschool Children:

Image Sharing

Yue XIANG

#### Abstract

The purpose of this study is as follows. Firstly, to clarify what kind of images are shared in children's cooperative play. Secondly, to investigate how images were shared in cooperative play. Finally, to investigate the relation between sharing images and the continuity of cooperative play. Cooperative plays of 5-year-old children were observed and teachers were interviewed. Cooperative plays in this study showed a smooth continuity and images, which included theme and concrete objects (things, story, roles), that were shared by children. Images were shared based on the experiences of the past and the play's flow of the day. Especially, children's common experiences were important for sharing images. Children shared images in play and the image sharing supported the smooth continuity of play.

Keywords: cooperative play, continuity of play, 5-year-old children, images, share

#### 1 問題と目的

幼稚園の子どもたちの遊びを観察してみると、遊びの種類にかかわらず、長く展開する遊びも、あまり展開しないで終わる遊びもある。展開する遊びでは子どもは遊びの面白さを感じ、「もっとやりたい」という気持ちで遊びを展開していると考えられる。

複数の子どもが参加する共同遊びでは、遊びの面白さを維持し、遊びを展開するためには、メンバー間のイメージ共有が必要になると推測できる。松本（1996）は保育の質を検討した研究において、「遊びを展開させるのには、子供と子供、子供と保育者との“イメージの共有”が大切である」と指摘している。

そこで、本研究では「共同遊びが展開する時、遊びのイメージがメンバー間で共有されている」という仮説を立てて、共同遊びの展開とイメージ共有の関連を検討する。

---

キーワード：共同遊び、展開、5歳児、イメージ、共有

\* お茶の水女子大学大学院博士前期課程 2016年度修了

## 1.1 先行研究

箕輪（2006b）を参考に、イメージが何に媒介されて共有されるのかに基づき、遊びに関する先行研究での知見を整理し述べる。また、イメージの共有が扱われることの多い仲間入りに関する研究での知見も別途整理し述べる。

### 発話・言葉

遊びの中では、子どもが喋り合う姿がよく見られる。イメージの共有に関して子どもたちの発話や言葉に着目した研究が行われている。ある子どもが発した言葉を通じて、その子どもが作った遊びの世界や状況は周りの子どもたちへ伝わり、周りの子どもたちもその言葉を通じて遊びのイメージを理解できると指摘されている（大岩・横井,2016）。宮田（2013）は3歳児の積み木遊びで見られた特徴的な行為を分析した。他者が自分の意図しない形体を作ろうとすると、子どもは他者に自分のイメージを伝える必要を感じ、イメージを言語化して表出し、他者に自分のイメージを共有させようとする旨を指摘した。

### 動き

子どもは遊びで言葉を通じて仲間とコミュニケーションを取るだけでなく、身体の動きでイメージ共有に至ることも見られる。砂上（2000）はごっこ遊びにおける「他者と同じ動きをすること」に注目した。ごっこ遊びにおけるイメージは、身体の動きと一体となっており、他者と同じ動きをすることは同じイメージを共有することに重なりと述べている。箕輪（2006a）は砂遊びにおける子ども同士のやりとりの特徴を検討した。他児の動きを理解し、お互いに類似した動きをとることが、イメージを共有して一緒に遊ぶことを支えていると指摘されている。岩田（2011）は、子どもたちはおままごとコーナーでそれぞれにフライパンを持ってお料理をするなどの同じ行為を通して、遊びの集団を創り上げ、遊びのイメージも共有すると指摘した。

### 物

物は子どもが自分たちの感情や懸念、さらに現在心を奪われている関心事を表現することのできるような手段を提供する。また大人や他の子どもたちと社会的相互作用をもつためのチャンネルを提供する（ガーヴェイ,1980）。物を媒介として、子どもたちのやりとりが成立していくとも指摘されている（無藤,1997）。

斉藤（2012）の研究では、仲間と同じ物（類似物）をもつ、同じ場を共有すること自体が、仲間とのかわりを結びつけている可能性が示唆された。岩田（2011）は遊びでの仲間集団の形成とそのプロセスに見られる「排除」「いざこざ」を検討し、同じモノをもたないことが、集団から「排除」される理由となると述べている。岩田（2007）は遊びにおける子どもの人間関係を考察するなかで、「物」についてのイメージが共有されていなかったために、いざこざが生じたと考えられる事例を報告した。

斉藤（2012）、岩田（2011）、岩田（2007）の研究では同じものをもつことが共同遊びを維持するために重要であることが示唆される。しかし、ガーヴェイの指摘からも考えられるように、物は遊びのイメージを表出したり、受け入れると言った遊びのイメージを共有する過程にもかかわっているのではないだろうか。

### 仲間入りとイメージ共有

仲間入りを検討する研究でも遊びのイメージ共有に言及されている。

青井（1991）は子どもの仲間入りのストラテジーについて検討した。共同遊びにおいて、仲間入り児は遊び集団側の遊びのイメージを理解し、自分の遊びに対するイメージを伝えて、遊び集団側の子どもと共有することが仲間入り成功の前提であると述べている。青井（1992）はさらに仲間入り児がいかにか共同遊びの集団へ統合したのかを考察した。仲間入り後、仲間入り児と遊び集団側は遊びのイメージについて情報交換を行ったと述べている。さらに、遊びのイメージの共有についてのやりとりは、遊びを発展させる機能を持つと指摘されている。青井（1992）と同様に、倉持（1995）は、仲間入りの段階で遊び集団内ですでに共有されている遊びのイメージについて、仲間入り側と遊び集団側間の情報伝達（例「これはスー

ブなの？」「これは赤ちゃんだからね」)が見られたと述べている。また、仲間入り後の遊びの展開とともに、新たなストーリーや役割が提示され、遊び集団内で共有されていくと指摘している。

## 1.2 本研究の目的

先行研究では、共同遊びの中で子ども達は言葉、動き、行動などの手段を媒介として、自分が持つイメージを表出したり、他人のイメージを理解したりして、遊びのイメージ共有を試みることを示された。また、子どもの仲間入りに関する研究では、イメージ共有は仲間入りにとって重要であり、遊びの展開にも関連していると指摘された。しかし、共同遊びでは具体的にどのようなイメージがあるのか、子どもたちはなぜイメージの共有ができるのか、どういうきっかけで共有するのかについてはまだ十分に明確にされていないといえるだろう。また、先行研究においてイメージの共有は遊びの展開と繋がっているとの指摘は共通しているが、具体的にどのような繋がりがあるのかは十分に明らかにされていないといえるだろう。

そこで、本研究は幼稚園児の共同遊びにおいて、どのようなイメージがどのようにして共有されるのか、イメージの共有は遊びの展開とどう繋がるのかを具体的に明らかにすることを目的とする。

本研究ではイメージの「共有」、遊びの「展開」という言葉をどう捉えているのかを述べる。イメージの「共有」とは、遊びのイメージが子ども間で共通していることを指す。共有に至る過程は様々だろう。子ども間で即時にイメージを共有する場合もあれば、やりとりがあり時間がかかって共有する場合も考えられる。共有の過程は様々であっても、最終的に子ども間でイメージが共通している場合、共有と判断する。

また、本研究ではごっこ遊びの事例が多く、しかも遊びの進め方や方向が様々で複雑である。遊びが続いていくこと、遊びが変化していくことを全体として検討するため、「展開」という言葉を採用することにした。ここでの「展開」とは、共同遊びの始まりから終わりまで、進行状況や変化など一連の流れと考えている。

## 2 方法

対象園は2年保育の公立幼稚園である。観察時には年少(4歳児)クラス、年長(5歳児)クラス各1クラスであった。2016年4月から9月末まで週2回程度、5歳児クラス(女児5名、男児7名、計12名;観察開始時平均年齢:5歳7ヶ月)の自由遊びを中心に参与観察した。観察日は9時(登園開始時)から5歳児クラスの保育室に入り、午後2時(降園開始時)まで観察を行った。手書きでメモを取り、その後フィールドノーツを作成した。事例中に登場した子どもの名前は同じアルファベットの場合、同一人物を指す。観察や保育の事情を確認するため、保育者に対するインタビューを行った。具体的には保育中または前後に、不明な点に関する簡単な質問を行った。さらに、夏休み中、保育者に一学期の観察について報告し、その後話を伺った。対象クラスの担任は今年度着任したため、4歳児の時のことは確認できていない場合もある。いずれのインタビューも子どもの遊びを分析する時の補足データとして用いた。

## 3 結果と考察

2016年4月～2016年9月末までの観察日数は合計29日間だった。自由遊び時間における共同遊びの事例は20事例が収集された。事例の平均持続時間は約42分である。なお、観察にはICレコーダーやAV機械は使用しなかったため、すべてはメモから計算したおおよその時間である。そのなか、29分以下は3事例、30分～40分は10事例、41分～60分は4事例、61分～90分は3事例であった。分析に使う事例の統一性(Corsaro,1985)を考慮したうえ、2事例のみであったルール遊び(サッカーゲーム)を除外し、ごっ

こ遊びの18事例について分析した。各事例にはテーマに対応した事例名をつけた。なお、本論文中では事例の一部を抜粋して示した。以下では遊びのイメージと共有及びイメージ共有の契機について具体的な事例に基づき述べる。

### 3.1 遊びのイメージと共有

遊びのイメージを「テーマ」と「具体像」に分けた。「具体像」についてはさらに「物」「ストーリー」「役」という下位カテゴリーを設定した。

本研究で分析した遊びはほとんどスムーズに展開していた。展開していた共同遊びにおいて、子どもたちは遊びのイメージ（遊びのテーマと具体像）について共有していたと考えられた。

#### 3.1.1 テーマ

本研究で観察された共同遊びにおいて、遊びのテーマは子どもたちに共有されていることが確認された。テーマは①発話、②物や行動、③発話・物や行動の併用という三つの手段を通じて共有されたと考えられた。以下は発話によるテーマ共有の事例である。

**事例1：誰か一緒にボーリングやろう？（2016年7月12日 事例「ボーリングごっこ」より抜粋）**

お弁当の後、一斉活動の製作が終わり、子どもたちは好きな遊びをやり始めた。A児はしばらく一人ですごろくをしていた。やがてA児はすごろくをやめて、部屋のなかにいる子どもに対して「誰か一緒にボーリングやろう？誰か一緒にボーリングやろう？」と言った。すると、B児がA児のところに来た。二人で積木を運んだりして、ボーリングのレーンなどを作りはじめた。

この事例では、A児は直接「ボーリング」と言いだし、遊びの参加者を誘いながら、周りの子どもたちに遊びのテーマを伝えていた。つまり、A児やほかの子どもにとって、A児がおうちごっこでも忍者ごっこでもなく、これからボーリングごっこをするということが明確である。そこで、B児はA児が発信したテーマを受け入れ接近してきたと考えられる。この時点でA児とB児は遊びのテーマ「ボーリングごっこ」を共有したと考えられる。その後A児とB児は実際にボーリングごっこをはじめた。

#### 3.1.2 具体像

共同遊びにおいて、遊びの具体像も共有されていたと考えられた。遊びにはどのような物があるか、どのようなストーリーで遊ぶか、どのような役が必要なのかについて、子どもたちは遊びの中で共有していったと考えられた。観察の期間内で何回も行われた探険ごっこと警察ごっこの「物」を例として述べる。

探険ごっこにおいて、子どもたちは同じような形の望遠鏡やベルト（図1<sup>11</sup>）などの「物」を使った。



図1 探険ごっこの望遠鏡とベルト

#### 望遠鏡

子どもたちが最初に探険ごっこに使った物は望遠鏡（形は双眼鏡であるが、子どもたちと担任はそれを望遠鏡と呼んでいた）であった。事例「探険ごっこI」において、保育者が昨日までの遊びを受けて「探

険ごっこを続けてやる？」と提案した後、G児は数人分の望遠鏡を持ってきて、他の子どもたちに配った。望遠鏡はトイレットペーパーの芯を二つ貼り付けて、穴をビニール製の半透明の色紙で覆ったもので、それに紐をつけて首にかける。担任の話によると、事例「探険ごっこⅠ」が観察された日より前にも子どもたちは自ら望遠鏡を作って、探険ごっこをはじめた。事例「探険ごっこⅠ」でも、担任が「探険ごっこ」といっただけで、G児とほかの子どもも自然にその望遠鏡を手にした。つまり、「探険ごっこには望遠鏡がある」ことや、「望遠鏡の形」について子どもたちは共有していたと考えられる。

### ベルト

探険ごっこのベルトは製作コーナーに置いてあるベルトの部品（担任が作ったもの）から作られた。部品は銀色や金色の硬めの紙を細い帯（サイズは約5cm×40cm）にし、その帯の両端を折って、1つの隙間に輪ゴムを入れてホッチキス針で止めたものである。子どもはそのベルトの部品に牛乳パックなどの空き箱を貼り付けた。空き箱は棒、拳銃、地図などを入れる容器である。最後にベルトの一端の穴に短いストローを刺し入れて、輪ゴムとストローを結びつけると、探険ごっこのベルトができあがった。次の事例はそのベルトについて共有した事例である。

#### 事例2：ベルトと探険ごっこ（2016年4月14日 事例「探険ごっこⅡ」より抜粋）

C児とD児は先日作ったベルトなどの道具をつけていた。それを見たE児はC児に話しかけた。

E（Cに）：「いれて。」

C（ベルトをつけながらEを見る）：「ベルト作って。」

E：「あるよ！」

するとE児は自分のロッカーに走って行ってベルトを持ってきた。そしてC児たちと一緒に探険ごっこをしはじめた。

E児はC児に対して仲間入りを試して、C児に「ベルト作って」と言われた。C児にとって探険ごっこには「ベルト」という物があるのだろう。それに対してE児は「あるよ」と答えて、自分のベルトを持ってきた。ここからみると、E児も「探険ごっこにベルトがある」ことを受け入れたのだろう。つまり、この時点でE児とC児は探険ごっこにおける「物」について共有したと考えられる。

警察ごっこにおいて、子どもたちは警察の帽子（図2）などの「物」を使った。

警察の帽子については、最初はA児が「警察の帽子作りたい」と言ったので、保育補助員が折り紙で作った。周りの子どもたちはA児の帽子を見て、気に入ったのか、「帽子ほしい」と言った。作り方は少し難しいので、帽子自体は保育補助員が作ってあげた。このため、形は同じであるが、帽子の色、模様、飾りなどは子どもたちが自分でやり、子どもにより違っていった。無地の帽子もあれば、水玉模様の帽子もあった。星が二つ付いている帽子もあれば、一つのみ付いている帽子もあった。

また、帽子を作ったのは4月21日であるが、5月24日の警察ごっこでも子どもたちは4月に作った帽子を出してかぶった。しかも、その帽子はずっと警察ごっこだけに使われた。それからみれば、「警察ごっこにはこの形の帽子がある」ということが子どもたちに共有されたと言えるだろう。



図2 警察ごっこの帽子

### 3.2 イメージ共有の契機

子どもは共同遊びでなぜイメージの共有ができるのか、どういう契機で共有するのかを考察する。その1つは過去の経験であり、もう1つは当日の遊びの流れと考えられる。

#### 3.2.1 過去の経験

子どもは過去に経験したことを遊びに取り入れることが指摘されている（内田,1986）。佐藤（2009）は幼児期の協同性を考察するため、5歳児がディズニーランドの乗り物を作った事例を分析した。子どもたちが遊びのイメージを共有した1つの理由は、遊びのメンバーは全員ディズニーランドに行った経験があるからだと述べている。また、ガーヴェイ（1980）は遊びの素材によって遊びの側面を分類するなかで、遊びの素材は実は経験の種類だと述べている。

子どもたちが過去に共通の経験をしていれば、共同遊びの素材をある程度共有していることになるだろう。つまり、ある特定の遊びが始まる前に、子どもたちはすでに遊びのイメージについて、ある程度共有しているのではないだろうか。過去の経験は園生活の経験と園外の経験を含むが、本研究は園生活の経験を中心に分析を行なった。以下では共同遊びの内容に対応すると考えられる具体的な過去の経験を挙げ、イメージ共有の契機としての過去の経験について考察する。

#### 事例3：おたまじゃくし釣りから探険ごっこへ（2016年4月19日 事例「おたまじゃくし釣りから探険ごっこⅢ」より抜粋）

D児とC児は釣竿を持って、ビニール袋で作られたおたまじゃくしを釣っていた。途中でD児はC児に話しかけた。

D：「ねえ！探険ごっこに行つて、おたまじゃくしを探しに行こう！」

C（うれしそうに即時に答えた）：「いいよ！」

二人はベルトなどをつけて探険に出発した。

事例でD児は「おたまじゃくし釣り→探険ごっこ」とテーマを変化させ、C児もすぐにそれを受け入れた。このテーマ変化の発想と共有には過去の経験が関連していると考えられる。実は「おたまじゃくし釣り」は過去に行われた「ぼうけんにいこう」という遊びと共通しているところがある。以下ではそれぞれの遊びについて具体的に述べる。

まずおたまじゃくし釣りはどういう遊びなのかについて説明する。4月に5歳児たちは遠足に行ったとき、おたまじゃくしを捕まえた。5月上旬までは5歳児の保育室の外（二階の外廊下）で飼っていた。ある日、担任の提案で子どもはおたまじゃくしを作った。全体的にはてるてる坊主の作り方と似ている。黒いビニール袋を小さく切って、中にトイレトーパーか紙を丸くしたものを包んで、セロハンテープで止める。頭のところに白くて丸いシールを貼り、その上に目玉を描く。最後に作った人の名前を書いたテープを貼ると完成する。そのおたまじゃくしを作ることに夢中になっていた子どもが数人いて、おたまじゃくしがたくさん作られた。担任は池を作って、おたまじゃくしを中に入れた。その池はいつも廊下か部屋のなかに置いてあった。

事例3の前に、D児は最初おたまじゃくしを作っていた。D児は「釣竿作りたい」と担任に伝えて、担任に手伝ってもらって新聞紙を丸めて棒を作り、棒の端っこに紐をつけた。担任がマグネットをあげると、D児はそのマグネットを紐と繋げた。これで釣竿が完成した。すると、担任は洗濯バサミをビニール製のおたまじゃくしの尻尾に挟んだ。D児もその真似をして、一個一個のおたまじゃくしに洗濯バサミをつけた。D児が釣竿を池にたらずと、洗濯バサミの金属部分がマグネットにくっついた。釣竿をあげると、おたまじゃくしが釣れた。これがおたまじゃくし釣りという遊びである（図3）。

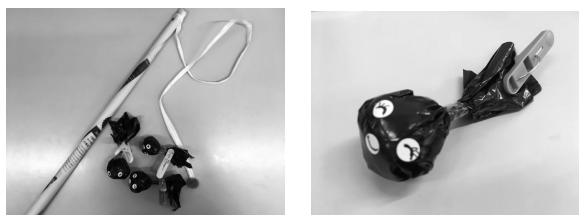


図3 おたまじゃくし釣りの道具

次に、5歳児が年少時に行った「ぼうけんにいこう」という遊びを説明する。「ぼうけんにいこう」は年少時の運動会での親子競技である。図4のように、子どもと保護者は2チームにわかれて①のところで集合する。スタートしたら、②のダンボールで作った船に乗って、③へ進む。③のところに置いてある釣竿で池の中の魚を釣る。釣れてきた魚を持って④まで行く。④のボードに魚を貼ったらまた船でスタートラインに戻る。この「ぼうけんにいこう」で注目したいのはパート③の釣りの仕組みである。年少時の担任は他園へ異動したため、当時の年長組の担任に確認したところ、パート③は釣竿に磁石が、魚にクリップがつけられていた。

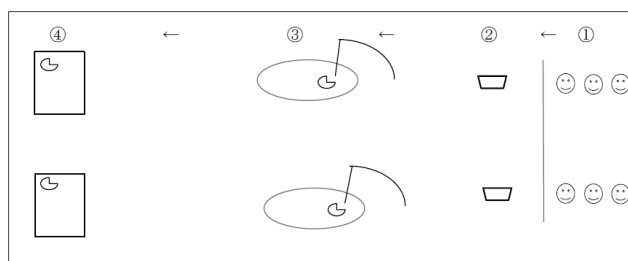


図4 「ぼうけんにいこう」の略図

おたまじゃくし釣りと魚釣りを比較すると、釣りの仕組みはよく似ている。また、「探険ごっこ」というテーマは「ぼうけんにいこう」のテーマと類似している。C児とD児は年少時の運動会で一緒に「ぼうけんにいこう」遊びを経験した。事例3が始まる前に、C児とD児は「探険ごっこ」というテーマと、何かを釣るやり方について、すでにある程度共有していたと考えられる。

D児は「ねえ！探険ごっこに行って、おたまじゃくしを探しに行こう！」と提案した後、C児は即時に受け入れた。一見すると、探険とおたまじゃくしは結びつかない。しかし、子どもたちには自然の多い公園に遠足に行っておたまじゃくしを捕まえた経験がある。探険ごっこの遊びでは、子どもたちは「いちごの畑」「蛇がいる森」「岩」「トンネル」など遠足の環境と似たような環境を設定した。また、「ぼうけんにいこう」で魚を釣ったという過去の遊びの経験がある。そのため、「おたまじゃくし釣りから探険ごっこへ」「探険ごっこでおたまじゃくしを探す」というイメージは共有されやすかったのではないだろうか。

### 3.2.2 当日の遊びの流れ

過去の経験だけではなく、その日ごとの遊びの流れもイメージが共有される契機と考えられる。

#### 空港警察ごっこ

##### 事例4：空港警察ごっこ（2016年5月17日 事例「空港警察ごっこ」より抜粋）

朝登園の支度が終わり、子どもたちは保育室で遊んでいた。

警察のベルトや帽子をつけているC児は「空港警察〇〇！（〇〇は聞き取れなかった内容）」と言った。

担任：「空港はないの？」

それを聞いて E 児と C 児、D 児は積み木で空港（飛行機？）を作り始めた。

そばにいた F 児は「そうだ！動物警察はどう？」と C 児たちに言った。F 児は 1 人で空港の隣でついでで囲んだスペースを作った。

その後、D 児、F 児、A 児、E 児は一緒にじゃれあった。（このとき C 児は一時的にほかのところに行っていたが、後で空港警察のところに戻ってきた。）

じゃれあっている途中で F 児は「ぼく、宇宙警察！飛行機警察だ！」と言った。

C 児と D 児たちがしていた警察ごっこはいつもの警察ごっこと少し違って、空港警察ごっこであった。F 児は最初このテーマを理解しなかったのか、「動物警察はどう？」と言い、「動物警察」をやろうとした。その後、F 児は空港警察ごっこの子どもたちとじゃれあってから、やはり一緒に遊びたかったのか、「宇宙警察」「飛行機警察」という空港警察ごっこに関連するような発話をした。C 児たちのそばで遊んでいた F 児は C 児たちの遊びの流れを見て、その日はいつもの「警察ごっこ」ではなく、「空港警察ごっこ」だと分かったのだろう。遊びのテーマがそこで共有されたといえるだろう。

さらに、テーマだけではなく、「ぼく、宇宙警察！飛行機警察！」という発話を通じて、F 児は自分が先に伝えた動物警察を演じているのではなく、今は宇宙警察・飛行機警察を演じていると伝えていたのだろう。宇宙警察・飛行機警察はこの日 C 児たちが演じている空港警察との関連が見られ、C 児たちにも否定されていなかった。そのため、F 児と C 児たちは役についても共有したのではないかと考える。

#### 砂場遊び

##### 事例 5：砂場遊び（2016 年 6 月 2 日 事例「砂場遊び」より抜粋）

###### ・火事と消防車

C 児と F 児は砂場で川を掘った。その川に水をいれて遊んでいた。川の側に砂山も作られた。C 児と F 児はトラックのおもちゃを砂場にもってきた。2 人はトラックに水をいれて、走らせていた。

F（笑顔でトラックを走らせながら）：「山で火事が起こっていました！ビービー！（トラックを山まで動かした）」

C：「山で火事が起こっていました！水不足です！大変です！」

C 児は言いながら、自分のトラックを F 児のトラックと一緒に山へ走らせた。トラックの中の水を砂山にかけた。

###### ・海賊船と海上警察

C 児は長さ 30 センチほどのパイプをとった。パイプの両端にカラーボールを詰めた。C 児は「海賊船」といいながら、それを川の上で動かした。

F 児は C 児の行動を見て、型抜きのおもちゃを川に浮かべた。

F 児は笑顔でおもちゃを C 児の海賊船に近づけた。

F：「海上警察が来ます！はい、逮捕します！」

C：「あー！キャー！」と歓声をあげた。

F 児の海上警察は C 児の海賊船と何度もわざとぶつかったりした。

F 児の「山で火事が起こっていました！ビービー！」というセリフの前から、C 児は F 児と一緒に川や山を作り、水を手足で感じ、トラックも動かしていた。F 児のストーリーの舞台となる場をここまで一緒に作り上げ、遊びの流れや文脈も共有してきていたと言えるだろう。そうした C 児にとっては、F 児のセリフ「山で火事が起こっていました！ビービー！」を通じて、F 児の意図や遊びのストーリーを理解することはたやすいことだったのではないだろうか。いわば F 児の提案したストーリー（①山で火事が起こる→②消防車が出動する）は C 児が提案することもできたようなストーリーだったのではないだろうか。C



児がF児のストーリーに乗るセリフ（「山で火事が起こっていました！水不足です！大変です！」）や動き（トラックを山へ走らせる）をすぐにとったのもこのためではないかと考えられる。

海賊船と海上警察の場面では、今度はC児が新しいイメージ（海賊船）を提案して遊びを展開している。C児は砂場の舞台のうち、山から川に目を転じ、船を浮かべている。C児の動きをみて、さらに「海賊船」という発言を聞いて、F児も川に目を転じ、C児と同様川に船（海上警察）を浮かべている。C児が海賊船を発想した背景は明確ではないが、F児が海上警察を思いついたのは、C児の海賊船がヒントだったのだろう。この場面においてもここまで二人が遊びの流れや文脈を共有してきたからこそ、C児の川への着目とそこで船を使ったストーリー展開をF児は理解したのではないだろうか。

二つの場面において、遊びの新たな展開が起こった時、今何を遊んでいるか、何を演じているかなどについて、C児とF児は共有したといえるだろう。「火事と消防車」では、F児はセリフで提案し、C児もセリフで応答した。「海賊船と海上警察」の中で、C児の「海賊船」という発話は独り言かF児への説明か明確には分からない。だが、F児の対応は説明ではなく、セリフと考えられるだろう。Sawyer (1997) は、遊びの枠（フレーム）の外に出て今後の遊びの流れについて提案と応答をするのではなく、セリフを通じて提案と応答を行うことを「非明示的・フレーム内の提案と応答 (a proposal and response that are implicit and in frame)」と呼んでいる。こういう即興的なやりとりで子どもたちは遊びを新たに展開させることがあると Sawyer は指摘している。

以上の分析から、当日の遊びの流れが共有されていることが、遊びのイメージが共有される契機になることが示唆される。当日の遊びで何を作ったのか、仲間は何をしたのか、何を話したのかなど当日の遊びの流れや文脈について、一緒に遊んできたその場で子どもたちは共有している。その共有に基づいて、一人の子どもが何かを演じたら、それが新たな要素を含む即興的なセリフや演技であっても、ほかの子どももその場で理解し対応しやすいただろう。このような即興的なやりとりと演技の中で、子どもたちは共に遊びのテーマ、物、ストーリー、役などを新たに創り上げて共有していくのだろう。当日の遊びの流れ、つまり当日の積み重ねの共有とその共有に基づいた即興的な演技を通じて、子どもは遊びの新たなイメージを共有していると考えられる。

## 4 総合考察と今後の課題

### 4.1 総合考察

本研究で観察された事例は十分に展開していた共同遊びである。展開していた共同遊びではイメージは基本的に共有されていたと考えられる。一方、警察ごっこの帽子で示唆されたように共有されるイメージはある範囲におけるものと考えられる。イメージの大枠が共有されながら遊びの自由度や柔軟性もある（境・伊藤・中坪,2014）ことは共同遊びの展開を支えているだろうと考えられる。

イメージの共有と遊びの展開の関連には次の3つのパターンが考えられる。第一に、多くの事例で見られたように、遊びの始まりから子どもたちはイメージを共有していて、遊びが順調に展開していく場合があると考えられる。例えば、「探険ごっこ」をすると決めたら、子どもたちは自然に探険の衣装などを着けて遊びはじめたという場面があった。最初からイメージは共有され、その共有は遊びの展開とともに続いていると考えられる。

第二に、遊びはじめた子どもたちがそれぞれ持っていた遊びのイメージが、遊びの展開とともに子どもたちに共有され、さらに遊びが展開していく場合があると考えられる。事例4「空港警察ごっこ」で示したように、C児たちは「空港警察ごっこ」のイメージを持っていたが、F児は最初そのイメージを共有していなかった。空港警察ごっこの子どもたちとじゃれあう中で、F児は「空港警察」に関連する発話をし

た。その時点で、F児はC児たちと「空港警察ごっこ」のイメージを共有したと考えられる。この後共有された「空港警察」のイメージで遊びはさらに展開した。

第三に、遊びの展開とともに、新たなイメージが提出され、この新たなイメージが共有されることによって、遊びがさらに展開していく場合もあると考えられる。事例5「砂場遊び」で示したように、C児とF児は演じながら遊びのストーリーなどを共有した。その共有の中で、砂場遊びは「火事と消防車」の遊びに新たに展開し、さらにそこを契機に「海賊船と海上警察」の遊びに新たに展開した。2人は共同でストーリーを創り上げることを通じてストーリーを共有した。ストーリーを創り上げることが遊びに変化をもち、次々と遊びが展開していったのだろう。つまり、新たなイメージの共有を土台にしてさらに遊びが展開したといえるだろう。

## 4.2 今後の課題

今回観察された事例はどれも十分に展開していた共同遊びであった。今後は十分展開しなかった共同遊びの事例と比較することで、イメージはどこまで共有されたら展開につながるのか、イメージが一部共有されていないことは遊びの展開にどう関連しているのかなど、共同遊びの展開とイメージの共有の関係をさらに検討する必要があるだろう。更に、今回観察された事例がどれも十分に展開していた共同遊びであった背景には、対象クラスが少人数であったことや、クラスでの仲間関係の状況など、子どもたちの間でイメージが共有されやすい状況があったとも考えられる。今後はこうした要因も含めた検討が必要だろう。

今回の分析から除外したサッカーゲームのようなルール遊びにおいて、遊びには具体的にどのようなイメージがあるのか、イメージはいかに共有されるのかも今後の課題になりうるだろう。その上でごっこ遊び、ルール遊びを含めた共同遊び全体として、遊びの展開とイメージの共有との関連を検討する必要があるだろう。

また、事例の中で、保育者が遊びのイメージを提出したり、子どもたちの遊びのイメージに関連する絵本を選んだりする様子が多く観察された。子どもの園生活で子どもにとって大きな存在である保育者はいかにイメージ共有と関わっているのか、本研究では十分に検討できなかった。今後はこの視点から検討する必要があるだろう。

---

## 注

<sup>1</sup> 本文の写真は筆者が観察記録に基づいて作った複製品である。

## 引用文献

- 青井倫子. (1991). 遊び場面における幼児の仲間入りのストラテジー. *広島大学教育学部紀要*: 第1部, **40**, 187-192.
- 青井倫子. (1992). 遊び集団への仲間入り児の統合過程. *広島大学教育学部紀要*: 第1部 (教育学), **41**, 191-199.
- Corsaro, W. A. (1985). *Friendship and peer culture in the early years*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- ガーヴェイ. (1980). 「ごっこ」の構造 (高橋たまき, 訳). 東京: サイエンス社.
- 岩田恵子. (2011). 幼稚園における仲間づくり: 「安心」関係から「信頼」関係を築く道筋の探究. *保育学研究*, **49**(2), 41-51.
- 岩田遵子. (2007). 現代社会における「子ども文化」成立の可能性. 東京: 風間書房.
- 倉持清美. (1995). 小集団を視座とした幼児の仲間関係. お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文. 東京: お茶の水女子大学.
- 松本秀子. (1996). 保育の質が遊びを決める: イメージの共有が遊びを展開させる. *日本保育学会大会研究論文集*, **49**, 648-649.

- 
- 箕輪潤子. (2006a). 幼児同士の砂遊びの特徴—ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして. *保育学研究*, **44**(2), 82-92.
- 箕輪潤子. (2006b). 幼児の共同遊びに関するレビュー：形態と展開に注目して. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **46**, 269-277.
- 宮田まり子. (2013). 3歳児の積み木遊びについて：行為と構造の変化に着目して. *保育学研究*, **51**(1), 50-60.
- 無藤 隆. (1997). *協同するからだことば*. 東京：金子書房.
- 大岩みちの・横井紘子. (2016). *遊びのリアリティー*. 東京：新曜社.
- 境愛一郎・伊藤 優・中坪史典. (2014). 3歳児の共同遊びの展開プロセス：「おうちごっこ」の変容と維持に注目して. *幼児教育研究年報*, **36**, 33-41.
- 斉藤多江子. (2012). 1～2歳児の仲間と物とのかかわり：「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して. *保育学研究*, **50**(2), 6-17.
- 佐藤康富. (2009). 幼児期の協同性における目的の生成と共有の過程. *保育学研究*, **47**(2), 39-48.
- Sawyer, R. K. (1997). *Pretend play as improvisation: conversation in the preschool classroom*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 砂上史子. (2000). ごっこ遊びにおける身体とイメージ：イメージの共有として他者と同じ動きをすること. *保育学研究*, **38**, 177-184.
- 内田伸子. (1986). *ごっこからファンタジーへ*. 東京：新曜社.

#### 付記

本研究はお茶の水女子大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。

#### 謝辞

快くご協力をいただき、保育を観察させていただきました幼稚園の先生方、保護者の方々と園児のみなさんに、心から感謝いたします。